

病について語りはじめるとき

——— 仏教思想の問題圏 ———

箕浦暁雄
大谷大学

病をめぐる問題ほど私たちの生活に纏わりついているものはない。ときに差し迫ったものとなり、私たちの生存を根底から脅かし、生の確かさを揺さぶる。病や健康については、専門家であるか否かに関わらず誰も大いに語り得るが、思い通りに行かず根本的に解決することが難しいという点で、その切実さは圧倒的である。病の切実さによって、私たちは悩まされ続けている。

病は、医療はもちろんのこと、政治・経済・歴史・文学・芸術など、あらゆる領域における重要な主題であることは言うまでもないし、学問の営みにおいても、医学のみならず、様々な領域に関わることは言を俟たない。では、仏教学という学問の営みを通して病について語りはじめるとき、人々の要請に応答するという仕方では何かしらのものを提供することができるだろうか。

ところで、仏典のなかでは、病という表現をもって何が語られてきたことになるのか。そこにはいかなる視点があるのか。まずは、いまいちど立ち止まって、病をめぐる主な言説の輪郭を確かめることから始めたい。本発表では、初期経典からアピダルマに至るいくつかの文献に基づいて検討する。これは、病をめぐる思索の足場を、仏教学という営みを通して築いてみようとする試みである。そうすることで、今日の社会において求められている課題に応えることに繋がればよい。

さて、ゴータマ青年の出家の動機は、老病死の苦しみというかたちで語られてきた。苦しみとしての病という視点に対して、初期経典をはじめとする仏典のなかで、仏陀はときに医王と称されてきた。病という表現に関わる教説や、医王という表現に関わる教説、そしてそうした教説を受けとめて解釈してきたアピダルマ文献の記述について多少の整理を行ってみる。

それらの記述を手がかりとして、老病死の苦しみをめぐる仏教の思索を十全なものとするために欠くべからざる視点が何かということについて確かめ直しておきたい。というのは、苦しみとしての病をめぐる思索するときに陥ってしまう思索の危うさがある。思想と呼ぶに値するものとして仏教の思索を重ねるために、常に付き纏う危うさについて確かめ、何に注意が払われなければならないかについて触れておきたい。また、さらに重要な問題として、臨床の現場で仏教の教学を携えてそれを貫き通そうとする態度と、臨床の現場から立ち上がってくる課題を仏教の教学として築き上げようとする態度との、この両者の緊張関係について考えてみたい。

キーワード: 初期経典、アピダルマ、医療、老病死の苦しみ、医王